

シリーズ

新・林業人

富山県西部森林組合 砺波支所
業務課 技師

瀬川 瑠衣子 さん

思いがけず林業の世界へ
「伐って終わり」ではない
新しい芽に喜び循環めざす

富山県西部森林組合

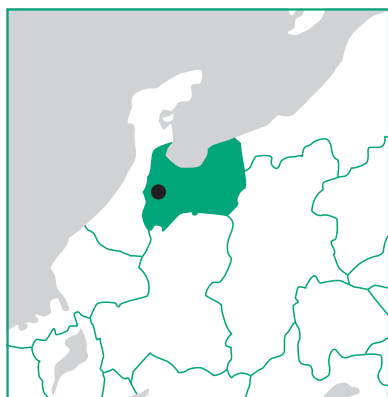
所在地 ● 富山県南砺市

設立 ● 2008年（5組合が合併）

経営内容 ● 森林整備、路網整備、竹林整備、
特殊伐採、合掌屋根葺替、おが
粉製造など

従業員 ● 臨時雇用含め111人

URL ● <https://www.forest-toyama.jp>



現場の従業員に進捗状況を確認。合間に四季折々の山の話聞くのが瀬川さんの楽しみの一つ

「誰もいない」林業ブース

瀬川瑠衣子さんは富山県富山市出身の33歳。専門学校卒業後に就職した企業で4年間事務職を務めた後、転職活動を開始。そのなかで偶然出会った林業の世界に興味を持ち、2015年4月に富山県西部森林組合に入社した。

転職を意識した時点で林業という選択肢はゼロだった。ただ、体を動かすことが好きで、実家が稲作農家だったこともあり、途中から第一次産業が選択肢の一つに上がってきた。そこで、とやま農林漁業就業支援フェアに参加。会場で農業の話を知っているうちに、誰も立ち寄らない林業ブースが目に入り、ずっと一人である担当者が気の毒になって相談席に座ったという。林業転職のきっかけとしては極めて珍しいエピソードだ。

当時は林業に関心があったわけではなく「せっかくなので話を聞いてみた」程度、その場限りのつもりだった。しかしその後、話を聞いた担当者から連絡があり、林業の現場を見学するうちに少しずつ興味が出てきた。特に、職業体験で教わった「伐るだけが林業ではない。伐った後はもう一度木を育

て、伐った木は山の外で誰かの役に立つ。それをずっと続けていくことが林業」という言葉に衝撃を受け、それまでの「きこりが木を伐る」というぼんやりとしたイメージが180度変わった。

とはいえ、具体的な仕事の内容はわからず、女性が働けるのか漠然とした不安もあり、自分が働くイメージはまだ持てなかった。職業体験に行った地域は富山県内でも山の傾斜が特に険しいところだった。仕事に同行するなかで「毎日山登りするのは大変」と率直に思ったこともあった。

瀬川さんはそこで、当時県内に一人しかいなかった女性の森林施業プランナーに出会う。測量や現場の写真撮影などを体験し、「大変だけど自分も頑張れるかもしれない」と、初めて自分が山で働く姿を描き始めた。

森林施業プランナーという仕事を知ったこと、女性はいないと思っていた山の仕事で、実際に働く女性の姿を見たこと、職業体験で聞いた「デスクワークでは得られない楽しさがある」という言葉も背中を押した。

そこで、ちょうど求人が出ていた富山県西部森林組合に思い切っ



生えている木の高さを測ったり、隣の森林との境界を確認したりして手入れする森林の現状を確かめ、作業計画を作成する(左・右上)
作業完了後伐った木の太さを測り、再び森林の状態を確認。森林所有者や行政への報告書をつくる(右下)



て応募した。組合側は当時のことを「突然、女性が応募してきて驚いた。仮に入社したとしても、働いていけるのかどうか、長続きしないのでは、と心配した」と振り返る。そんな雰囲気を感じてしまったのか「面接ではまったく手応えが感じられなかった。だから採用の連絡がきたときは本当にびっくりした」という。

所有者との交渉に悩む

瀬川さんが森林施業プランナーの仕事に就いたのは入社2年目。最初は先輩のサポートをしながら見よう見まねで仕事のやり方を覚え、半年ほど経ったころ一人で担当を任されるようになった。

森林施業プランナーの主な仕事は、間伐など森林の手入れをする前に現地調査をおこない、作業計画を立てて見積もりを作成し、森林所有者の同意を得るまでの準備。そして作業が終わった後の確認、報告だ。

富山県西部森林組合の場合、管理する森林の面積は7万4054畝と広いが、一人当たりが所有する面積は0.01畝程度と極めて小規模で、1畝規模の所有者はまれという零細所有エリア。小面積

のままでは作業効率が悪いいため、個々の小さな森林を集めて一つの森林と見なし、作業しやすい大きな面積にする「集約化」に力を入れている。

一口に森林を集めるといっても、数十〜数百人の森林所有者から同じ作業計画に同意を得なければならず、膨大な手間と時間がかかる。さまざまな森林所有者がいて、それぞれに自分の森林に対する考え方が異なるからだ。森林施業プランナーが立てた計画を説明し、同意を得る流れだが、瀬川さんは「最初はうまく説明できなかった。自分が立てた計画に対して『それはやりたくない』と言われたり、説明しているうちに『やる気がなくなった』と言われたり。途中で頓挫してしまい、落ち込むこともあった。説明に行くときは今でも悩むことが多い」と難しさを語る。

資格で自信をつける

だが、仕事の落ち込みは仕事で取り戻すというのが瀬川さんのモットーだ。森林の手入れが終わる報告に行くと、森林所有者から「やつてくれてありがとう」「山がきれいになった」と言われることがある。瀬川さんは「そう言ってもらえ



森林の情報はデータで管理し、それを基に作業計画を立てる

ると、やってよかったと思うし、それを励みに頑張れた」という。女性であることを特に意識はしていなかったが「女性ということでは珍しがられ、名前もすぐ覚えてもらえた。女性で大丈夫かと思われれることもあったが、女性だから話しやすいと良く思ってくれる人もいた」と振り返る。

うまくいかないことがあれば、上司や先輩が話を聞いてくれた。男性女性関係なく、相談しやすい職場の雰囲気も支えになったという。当時を知る上司は「女性ということは関係なく、男性と同じように仕事を任せた。正直、最初はで

きないかもしれないと心配したが、こちらが思っていた以上に仕事ができる部下に成長してくれた」と仕事ぶりに太鼓判を押す。

森林施業プランナーの資格を取ったことも自信につながった。組合では従業員の社歴や仕事内容に合った資格の取得を推奨している。資格取得者が講師になっての勉強会や、上司による模擬面接など、組合を上げて全面サポートしているのだ。瀬川さんも先輩にならない、上司と面接の練習を重ね、プランナーの資格を取得した。

資格がなくても仕事はできるが、森林・林業関係の知識を身につけ、プランナーの資格を持っていると言えるようになったことで、自信を持つて森林所有者に話ができるようになったという。チェーンソーの使用や重機の操縦に必要な資格も取得し、今後は施工管理に必要な資格をめざしている。「この資格があれば、県の公共工事など大きな現場も担当できるようになる」と次の目標を語る。

組合が掲げる、「伐って植えて育てる、循環できる林業の実現」にも貢献したいと話す。循環型林業の説明はまだ難しいこともあるが、「森林を手入れした後の確認調

査で、新しい若木がちゃんと芽吹いているのを見つけると嬉しくなる」という瀬川さん自身の体験は、どんな説明よりも説得力がある。

林業の仕事に女性も関心を

林業の仕事は人手不足が深刻な問題となっている。そのなかで瀬川さんは「プランナーの仕事は女性も男性も垣根なく取り組める仕事。林業は男性の仕事と思いがちですが、女性にも関心を持ってほしい」という。

一方で、入社してから「こんなはずではなかった」とギャップを感じることが少しでも減るように、職業体験やインターンシップの参加者には、自分が大変だと感じたことを率直に、しっかりと伝えるように心がけているという。

それは例えば、汚れる、虫が多い、雨の日も雪の日も屋外の仕事はある、そして最大のトイレ問題などだ。入社1年目、上司と一緒に入った山で、歩く速度が遅くて一人はぐれてしまい、民家に駆けこんだという失敗談も隠さず話す。そのうえで、それを乗り越えられるかどうか、自然のなかで働くことにデスクワークとは違う楽しみを見つけられるかどうか、仕事を続

けられる鍵になると言葉を続ける。

思いがけず決まった転職先。うまくいかず落ち込んだり、先輩、顧客の言葉に支えられ、資格を取って自信をつけ、自分なりの目標を持つ。語られるエピソードから、はやりの「林業女子」や「女性活躍」という言葉は出てこない。見えてくるのは、瀬川瑠衣子という一人の若者が、自分に合った仕事を見つけ真正面から取り組む姿と、上司や先輩が部下や後輩の仕事を支え信頼する、働きやすい職場環境だ。「林業」でも「女性」でもない、働き方の理想の一つがそこにあるように思える。

瀬川さんの入社後、組合には2人の女性が森林施業プランナーとして入社した。最近ではインターンシップでも以前より女性の数が増えている。すべてが瀬川さんの活躍の効果とまではいえないが、先達がいるということがきっかけになっていることは間違いないだろう。

森林の循環はまだ緒に就いたばかりだが、人材の循環は始まったようだ。9年前、瀬川さんが見た誰もいない林業の就業相談席が、にぎわう日も遠くないかもしれない。

(日刊木材新聞社 林貴和子／文 糸井潤／撮影)